飯盛町埋蔵文化財調査報告書第２集

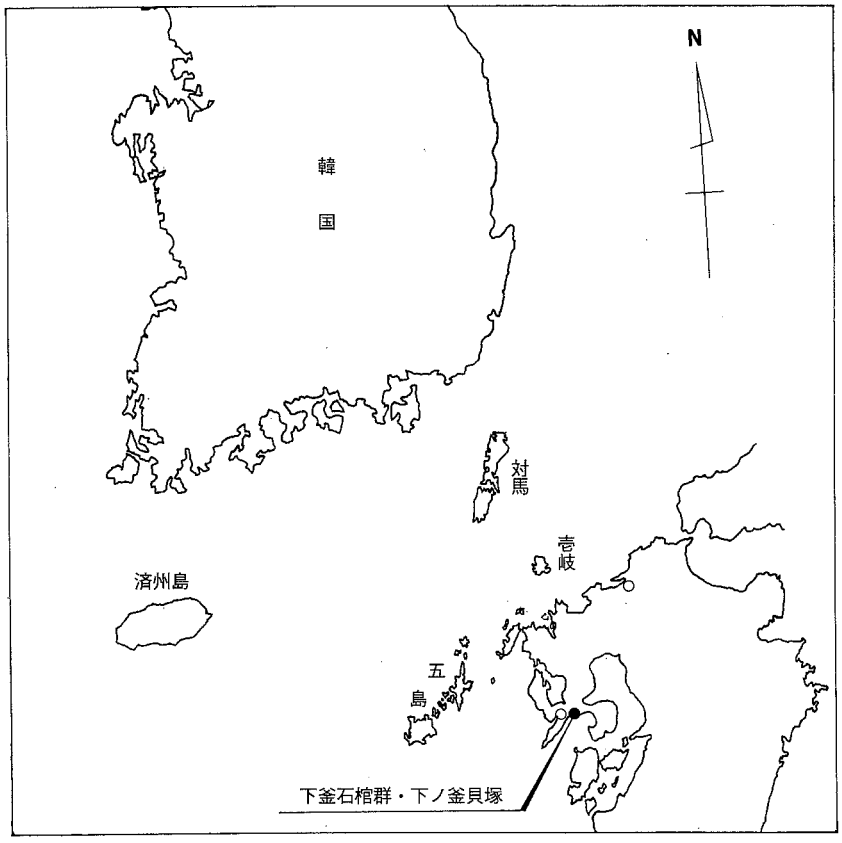
下釜石棺群・下ノ釜貝塚

1995

長崎県飯盛町教育委員会

飯盛町埋蔵文化財調査報告書第２集

下釜石棺群・下ノ釜貝塚



1995

長崎県飯盛町教育委員会

発刊にあたって

昭和２年琵琶島海水浴場が開かれるとき，横津も江ノ浦公園の一部として松林の間に道路がつくられた。その工事中に平石の下から一体の人骨と附近から数種の石器類が出土したので，当時，長崎大学医学部の鑑定を求めた。更に調査を進めたところ貝塚，石槨の発見，二体の人骨の発掘をする等，原始時代の住民と遺跡が明らかとなった。然し発掘された資料は原爆で焼失したため，現存しないが，住民にとっては大きな関心と理解の深まりができ今日に至っている。

平成５年には横津一帯の防風林補植事業のために県文化課のご指導のもと調査が進められ，横津遺跡の調査結果がまとめられ発刊となった。

平成７年３月

飯盛町　教育長

橋　本　忠　彦

例　　言

一．本書は，平成５年９月20日～10月13日に実施した飯盛町下釜名横津の下釜石棺群の基数確認の為の範囲確認調査の結果報告書である。

二．調査は飯盛町教育委員会が主体となり，長崎県文化課が担当した。

三．調査関係者は以下のとおりである。

飯盛町教育委員会	橋本　忠彦	教育長
	池下　　巖	社会教育係長
長崎県教育庁文化課	村川　逸朗	文化財保護主事
調査協力者	久富　達也	長崎県文化財保護指導員

四．土器・石器の実測・拓本は森崎京子，川脇いつ子，荒木美保，徳永妙子による。本書の執筆・編集は村川が行った。

本文目次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の地理的歴史的環境……1

Ⅲ　調　　査

　1．調査概要……5

　2．土　層……5

Ⅳ　遺　　構……7

Ⅴ　出土遺物

　1．土　器……13

　2．石　器……19

Ⅵ　ま　と　め……20

挿図目次

第1図　周辺の遺跡……3

第2図　土層図1/40……6

第3図　遺構及び試掘壙配置図……8

第4図　1号墳石室1/20……9

第5図　2号墳石室1/20……10

第6図　3号石棺1/20……11

第7図　4号石棺1/20……12

第8図　出土土器①1/2……14

第9図　出土土器②1/2……15

第10図　出土土器③1/2……16

第11図　出土土器④1/2……17

第12図　出土石器①1/2……18

第13図　出土石器②1/2……19

第14図　前島古墳群第6号墳……20

第15図　埋葬地と住居地域関係様式図……22

表 目 次

第１表　遺跡地名表……2

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景・発掘状況
図版２　土層壁面及びＴＰ６集石
図版３　１号墳石室
図版４　２号墳石室
図版５　３号石棺，４号石棺
図版６　寛政４年（1792）の雲仙岳大噴火に伴う「島原大変」の遭難者を埋葬した積石塚
図版７　出土土器①１／２
図版８　出土土器②１／２
図版９　出土石器　１／２
図版10　前島古墳群第６号墳発掘状況

I　調査に至る経緯

飯盛町発注による，飯盛町下釜名横津の「保安林整備工事」の過程で，下釜石棺群の中の石棺が未調査のまま破壊された。工期は平成4年2月3日～平成4年3月27日で，3月10日頃土木作業員が掘削機械で作業中，前記の石棺を掘り起こしたものであった。その後，工事担当者から役場を経由して教育委員会に連絡が入った。

平成4年7月24日，飯盛町教育長より相談をうけた県文化財保護指導員；古賀力氏より県文化課へ一報が入った。同年8月18日，無届け工事による遺跡破壊について，顛末書，始末書，工事届けの提出があった。平成5年3月31日，飯盛町教委と協議を行い，防風林植栽の予定もあることから広く石棺の基数確認調査を実施することとなった。平成5年9月20日～10月13日，石棺基数確認の為の調査を実施した。調査面積は130㎡である。

II　遺跡の地理的歴史的環境

飯盛町は，長崎半島と島原半島に挟まれた橘湾の最奥部に位置している。海上からの航海を考えた場合は，島原半島の雲仙岳を目印とし，広い海域をもつ橘湾の湾奥ということで，目標としやすい位置にあるといえる。江ノ浦の奥に広がる平野部は宝永4年（1707）に干拓の工事が完了した干拓地であるが，干拓以前は「月の港」と呼ばれる港湾であった。遺跡は，江ノ浦川の河川堆積物によって形成されたラグーンの礫混じりの砂による砂堆上に立地している。

町内は橘湾に面する南を除き周囲を山麓及び丘陵地に囲まれている。北に八天岳が横たわり，西には町内を東西に二分する形で飯盛山・佐田岳を中心とする丘陵が北から南へ走っている。昭和30年に合併して飯盛村となる以前は，西半部を田結村，東半部を江ノ浦村と呼称していた。

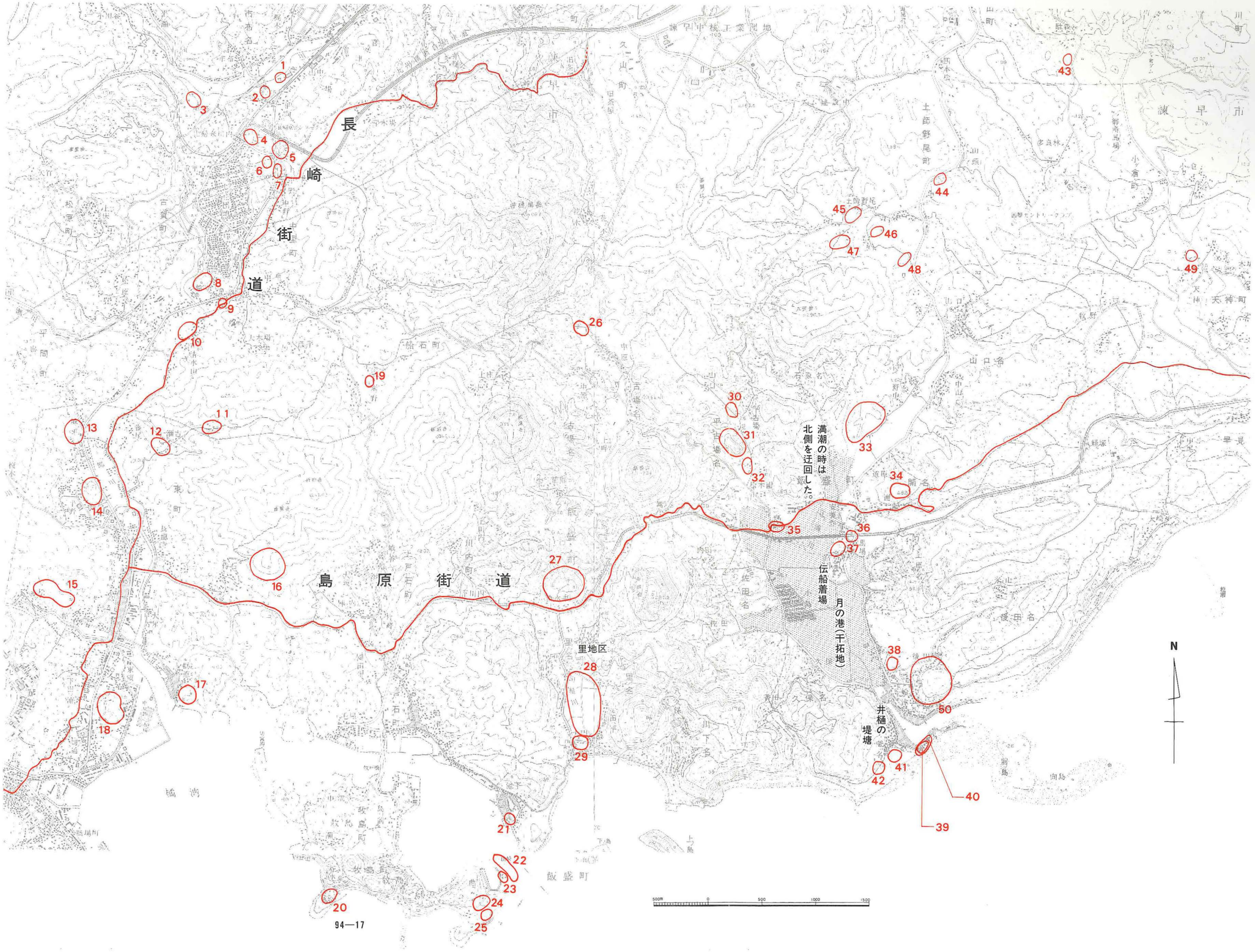
西隣は長崎市矢上であるが，幕末には外国船の来航に備えて矢上蛎道日向平台場跡，矢上東房山台場跡等が築かれた。第二次世界大戦以前は，島原半島西目の千々石・小浜・京泊への定期航路の発着場としても繁栄した。この様に中・近世及び近・現代における海上交通の要衝であった。加えるに，近世では，長崎街道と，これから分岐する島原街道という陸上交通の要衝でもあった。

当該報告遺跡周辺の遺跡をみてみると，橘湾沿岸には外洋に面した砂丘上に立地する縄文時代及び弥生時代の貝塚が知られている。第1図29の大門貝塚，諫早市の有喜貝塚等であるが，他にも同様の遺跡が数多く知られている。

下釜石棺群の石棺及び石室と同類と思われるものとしては，同じく飯盛町池下名の池下石棺群，長崎市牧島町の曲崎古墳群，西彼杵郡時津町の前島古墳群等がある。いずれも島及び岬に立地しており，海に面しているところから，海を生活の舞台とする海女（あま）・海士（あまんし）等の漁撈・採集の生活，または海上交通の担い手としての海民としての姿も想像されるのではないだろうか。

第Ⅰ表　遺跡地名表

No.	遺跡地図No.	名称	所在地	種別	立地	時代	備考
1	89 — 46	尾ノ上遺跡	多良見町市布名尾ノ上	遺物包含地	平地	先・縄	
2	— 45	古鍛冶屋遺跡	〃　〃　古鍛冶屋	〃	〃	〃	
3	— 44	轟遺跡	〃　〃　轟	〃	台地	〃	
4	— 43	中野遺跡	〃　〃　中野	〃	丘陵	先・縄・中	
5	— 42	上中野遺跡	長崎市中里町上中野	〃	台地	縄文	
6	— 40	芝原遺跡B	〃　〃　芝原	〃	〃	先・縄	
7	— 41	〃　A	〃　〃　〃	〃	〃	縄文	
8	— 38	古賀城跡	〃　古賀町館	城跡	丘陵	中世	
9	— 37	福瑞寺キリシタン墓碑	〃　〃　福瑞寺	キリシタン墓碑	平地	近世	
10	— 36	五反五畝遺跡	〃　中里町	遺物包含地	丘陵	縄文	
11	— 35	背古遺跡	〃　東町清水山背古	〃	山麓	縄文	
12	— 34	瀬古窯跡	〃　〃　瀬古	窯跡	山裾	近世	
13	— 33	平野城山城跡	〃　平間町城平	城跡	丘陵	中世	
14	— 32	矢上城山城跡	〃　矢上町平野	〃	山	〃	
15	— 27	矢上城跡	〃　田中町館	〃	丘陵	〃	
16	— 31	戸石城跡	〃　上戸石町	〃	山	〃	
17	— 30	矢上蛎道日向平台場跡	〃　東町蛎道	台場跡	〃	近世	
18	— 29	矢上東房山台場跡	〃　田中町	〃	丘陵	〃	
19	— 66	千束野遺跡	〃　船石町千束野	遺物包含地	〃	旧石器	
20	94 — 17	牧島黒瀬崎台場跡	〃　牧島町	台場跡	〃	近世	
21	89 — 61	池下石棺群	飯盛町池下名池神社境内	墳墓	台地	古墳	
22	94 — 21	曲崎古墳群	長崎市牧島町曲	古墳	礫丘	古墳	国指定
23	— 20	曲海底遺跡	〃　〃　〃	遺物包含地	海底	縄～古	
24	— 18	曲遺跡	〃　〃　〃	〃	丘陵	先・縄	
25	— 19	牧島魚見岳台場跡	〃　〃　〃	台場跡	〃	近世	
26	89 — 58	榎原遺跡	飯盛町古場名榎原	遺物包含地	台地	縄文	
27	— 68	東城跡	〃　里名	城跡	丘陵	中世	
28	— 59	条里跡	〃　〃	条里遺構	平地	奈良	
29	— 60	大門貝塚	〃　〃　大門	貝塚	〃	弥・古	
30	90 — 8	山ノ口遺跡	〃　平古場名山ノ口	遺物包含地	平野	縄文	
31	— 9	平古場城跡	〃　〃	城跡	丘陵	中世	
32	— 10	平古場遺跡	〃　〃	遺物包含地	平野	先・縄	
33	— 77	岡城跡	〃　野中名	城跡	丘陵	中世	
34	— 20	囲城跡	〃　囲名	城跡	〃	〃	
35	— 12	普同寺下遺跡	〃　松木園寺下	遺物包含地	平野	鎌倉	
36	— 14	開遺跡	〃　開名	〃	〃	弥・中	
37	— 13	西馬場遺跡	〃　〃　西馬場	〃	〃	先・縄	
38	— 19	築崎遺跡	〃　後田字築崎	〃	丘陵	縄・弥・中	
39	**— 18**	**下ノ釜貝塚**	**〃　下釜名**	**貝塚**	**岬**	**縄・弥**	
40	**— 17**	**下釜石棺群**	**〃　〃　横津**	**墳墓**	**〃**	**古墳**	
41	— 16	上原遺跡	〃　〃　上原	遺物包含地	丘陵	縄文	
42	— 15	下屯山遺跡	〃　〃　下屯山	〃	〃	縄・古	
43	— 27	駄森積石塚	諫早市栗面町駄森	積石塚	〃		
44	— 25	土師野尾遺跡	〃　土師野尾町	遺物包含地	〃	縄文	
45	— 22	下後古場遺跡	〃　〃	〃	〃	〃	
46	— 23	土師野尾古窯跡	〃　〃	窯跡	〃	近世	
47	— 21	船蔵石	〃　〃	積石塚	〃		
48	— 24	土師野尾窯跡	〃　〃	窯跡	〃	近世	
49	— 28	堤の端遺跡	〃　天神町		〃		
50		後田城跡	飯盛町後田名	城跡	〃	中世	



第Ⅰ図　周辺の遺跡

III 調　　査

1．調 査 概 要

今回の調査の目的は，今後当該遺跡が立地する岬上に防風林植栽の予定等もあるところから，石棺及び石室墳の基数を確認し，これらの遺跡保存と植栽工事等との調整を図る為の基礎資料を得ることにあった。

まず，「保安林整備工事」の過程で破壊された石棺の周囲から試掘壙ＴＰ１・２を設定した。地表から１m70cm程下げたが，礫層と砂層等が互層をなしており遺物等はＴＰ１，５層から高坏脚部の破片を検出したのみであった。この周囲では他にＴＰ10～12も設定したが，石棺らしきものは検出されなかった。次に現有の石室墳の周囲に試掘壙を設定したが，公園から海岸部へ抜ける道路の西側部分は「保安林整備工事」は行わないとのことだったので試掘壙は設定しなかった。防風林の中に所在する石室墳の回りには，ＴＰ３・４・５・７等を設定したが，ＴＰ３，西壁中で比較的小ぶりの石棺を検出するにとどまった。出土遺物では，ＴＰ３から弥生時代前期の如意形口縁の破片，同じくＴＰ３，加えてＴＰ４・５から弥生時代中期の甕や壺等が出土した。

現有及び既知の石棺及び石室墳の間にも，ＴＰ６・８，ＴＰ９等を設定したが，石棺及び石室等は検出できなかった。ＴＰ６・８・４等の範囲では，西平式もしくは三万田式の土器とともに「鈴桶技法」による刃器，十字形石器等が出土した。縄文時代後期の遺跡範囲である。

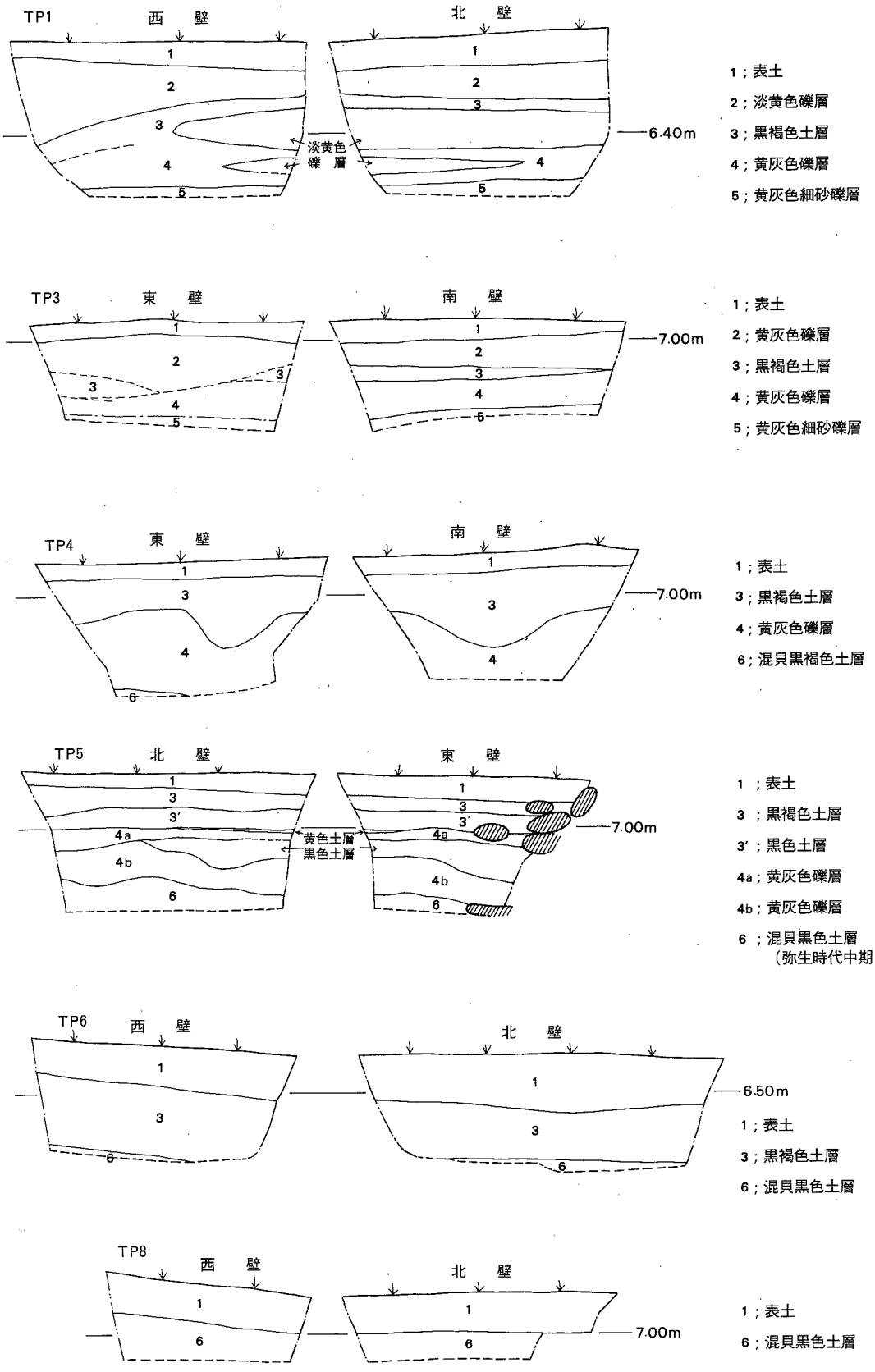
今回の調査で新たに発見した石棺は１基のみにとどまった。工事中に発見された石棺及び既知の石室墳については，棺内外の清掃と実測をして調査を終了した。既知の石室墳を道路そばのものから１号石室墳，防風林の中のものを２号石室墳，今回発見した石棺を３号石棺，工事中に発見された石棺を４号石棺とこれからは呼ぶこととしたい。

また，岬の先端に近い場所に寛政４年（1792）の雲仙岳大噴火に伴う「島原大変」の遭難者を埋葬した積石塚を確認した。１号石室墳の南側には，地元の方よりの聞きとりにより墳墓推定地を２箇所あげている（第３図）。

2．土　　層

先に調査概要のところで述べたように，ＴＰ６・８・４が縄文時代後期の遺跡範囲であり，それに加えてＴＰ３・５・７が弥生時代前期・中期の遺跡範囲であるが，この範囲は同じく貝塚の範囲でもある。今回の調査の目的は石棺及び石室の基数確認であるので，縄文時代後期，弥生時代前期・中期の貝塚まで確認できればそれ以上は掘り下げなかった。

縄文時代後期の貝塚の範囲では，表土の下に混貝黒色土層があり，ＴＰ６では間層として貝が混じらない黒色土層がある。弥生時代の貝塚の範囲ＴＰ３・４・５等では黄灰色礫層が貝層の上に堆積している。ＴＰ９以東は貝塚は存在せず，ＴＰ１・２では黒褐色土層の下に黄灰色礫層と黄灰色細砂礫層が互層をなしている。ＴＰ１の５層から高坏の脚部片が出土した。


TP1
西　壁
北　壁
1
2
3
4
5
淡黄色
礫　層
6.40m
1；表土
2；淡黄色礫層
3；黒褐色土層
4；黄灰色礫層
5；黄灰色細砂礫層
TP3
東　壁
南　壁
7.00m
1；表土
2；黄灰色礫層
3；黒褐色土層
4；黄灰色礫層
5；黄灰色細砂礫層
TP4
東　壁
南　壁
6
7.00m
1；表土
3；黒褐色土層
4；黄灰色礫層
6；混貝黒褐色土層
TP5
北　壁
東　壁
3'
4a
4b
黄色土層
黒色土層
7.00m
1　；表土
3　；黒褐色土層
3'；黒色土層
4a；黄灰色礫層
4b；黄灰色礫層
6　；混貝黒色土層
（弥生時代中期）
TP6
西　壁
北　壁
6.50m
1；表土
3；黒褐色土層
6；混貝黒色土層
TP8
西　壁
北　壁
7.00m
1；表土
6；混貝黒色土層

第2図　土層図　1/40

IV 遺　　構

今回の調査で新たに発見したのは3号石棺のみであるが，既知の1・2号墳石室墳，そして「保安林整備工事」の過程で破壊された4号石棺，島原大変時の遭難者を埋葬した積石塚等を発見・確認した。

1号墳石室

昭和2年に発見された。中に人骨が3体あり，一体には石枕，一体には貝輪が装着してあったといわれる。付近より石斧，石鏃，石包丁，縄文土器出土。

今回の調査では石室内外の清掃及び実測を行った。大ぶりの平石を側石として大形の石棺を形成した後，その側石の上に海浜円礫等を積上げて石室を作り上げている。頭位は北東を向いている。石室の内法は長さ173cm。最大幅55cm。最小幅32cm。北側の蓋石が残存しているが，蓋石下面から床面までの深さ66cmをはかる。北側に枕石が残っている。平面図でみると中央部が狭くなる形をしている。出土遺物等は検出していない。元々は封土があったものと思われるが，今は失われ石室が露出している。

2号墳石室

1号石室の北東側40mの防風林の中に位置する。以前より開口しており，棺内の人骨及び出土遺物の有無は不明である。1号墳石室と同様に大形の石棺を形成した後，その側石の上に海浜円礫等を積上げて石室を作り上げている。石枕が残存している北側の蓋石が残存している。これは1号石室も同様であるが，この2号石室の方は南側に蓋石が残っており大きさがわかるが，北側の蓋石に比べて厚味がなく軽いので動かしやすかったものだろうか。頭位も1号墳石室と同じく北東を向いている。石室の内法は長さ205cm，最大幅84cm，最小幅50cm，蓋石下面から床面までの深さ80cmをはかる。平面図でみると1号墳石室と同じく中央部が狭くなっている。構造，頭位の方向等1号石室と同じだが，大きさはこの2号墳石室がひと回り大きい。元々は封土があったものだろう。第2図土層図のＴＰ5東壁にみるような葺石の裾部と思しき石を積み上げた状況もみうけられた。

3号石棺

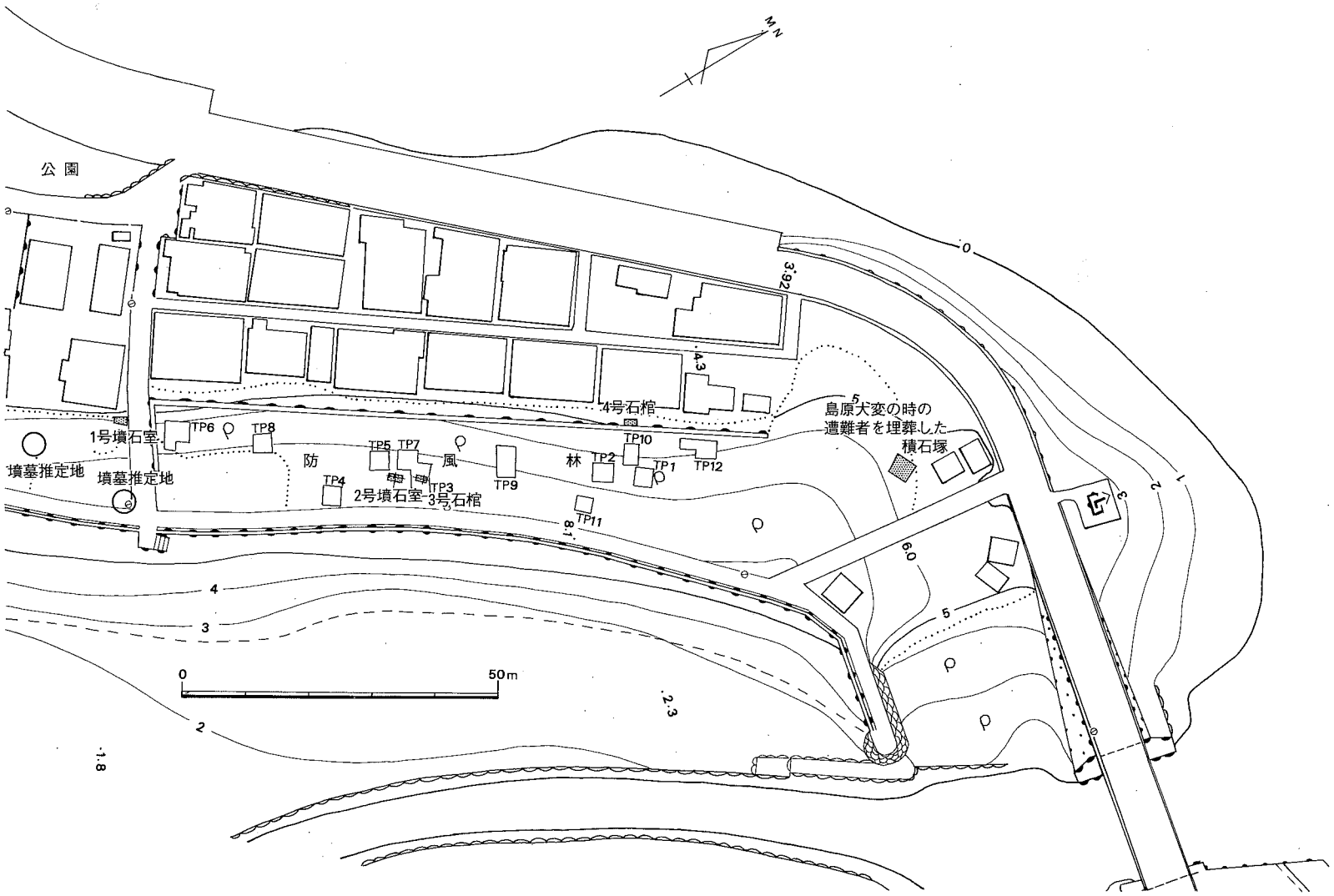
2号墳石室の北東側2m程の位置で，今回新しく発見した石棺である。2層の黄灰色礫層中で確認した。5個程のやや平べったい海浜円礫で石棺を構築している。蓋石はなく，出土遺物等は確認されなかった。長軸は北東を示している。2号石室との何らかの関係も考えられる。長さ1m，幅35cm。

4号石棺

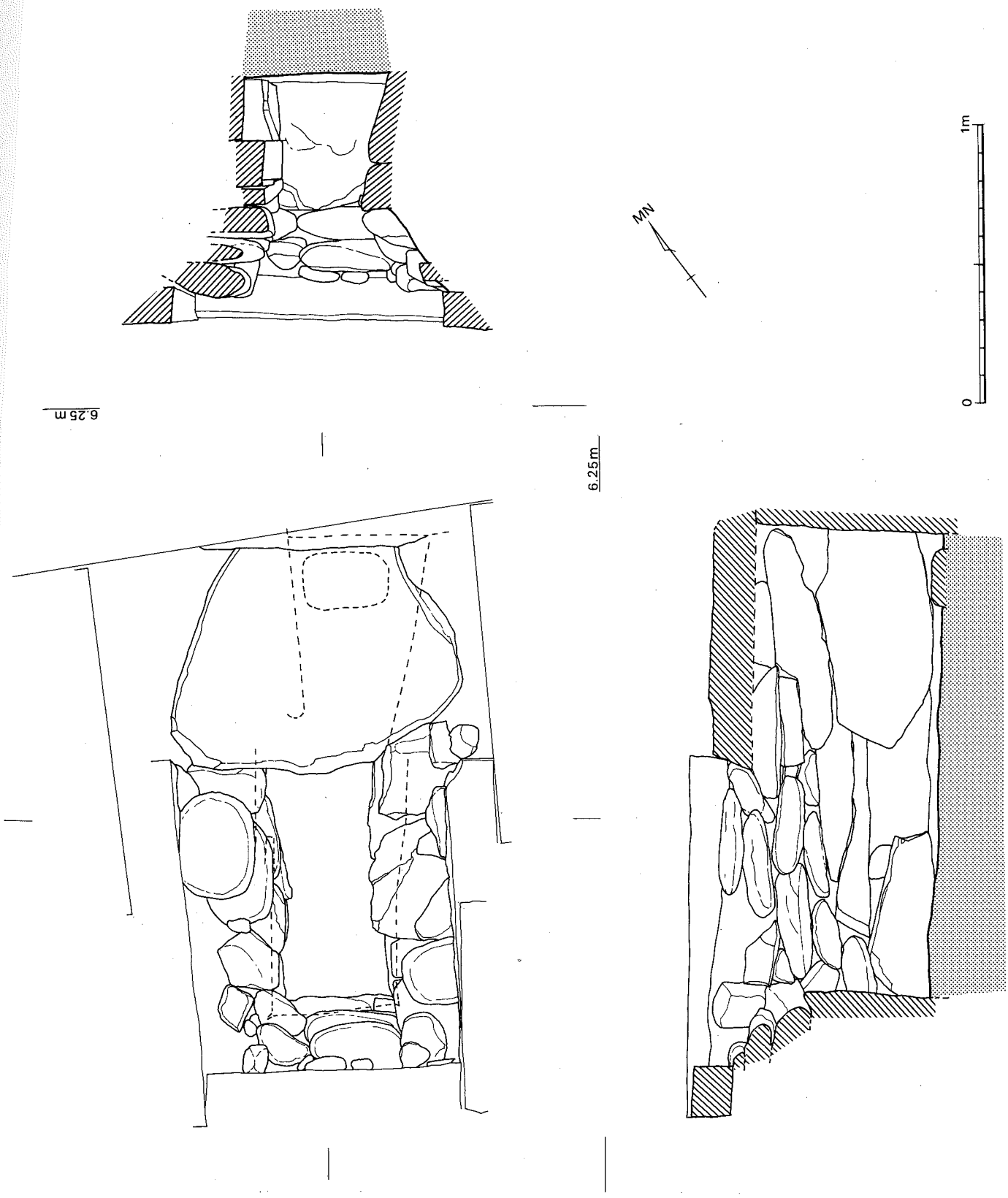
1号墳石室の北東側80m程の位置にある。「保安林整備工事」中に3月10日頃発見された。調査の時には蓋石はなく，東側の側石は擁壁工事のコンクリートの基礎部分でこわされていた。棺床まで掘下げたが出土遺物等は確認できなかった。西側の側石は結晶片岩製の一枚岩である。長軸はやはり北東を示す。小口材は側壁の中に入る。北東側の小口材が大きいのでこちらが頭位であろうか。石棺の内法は長さ170cm，深さ70cmである。幅は確定できないが現状観察では70cm程である。

積石塚

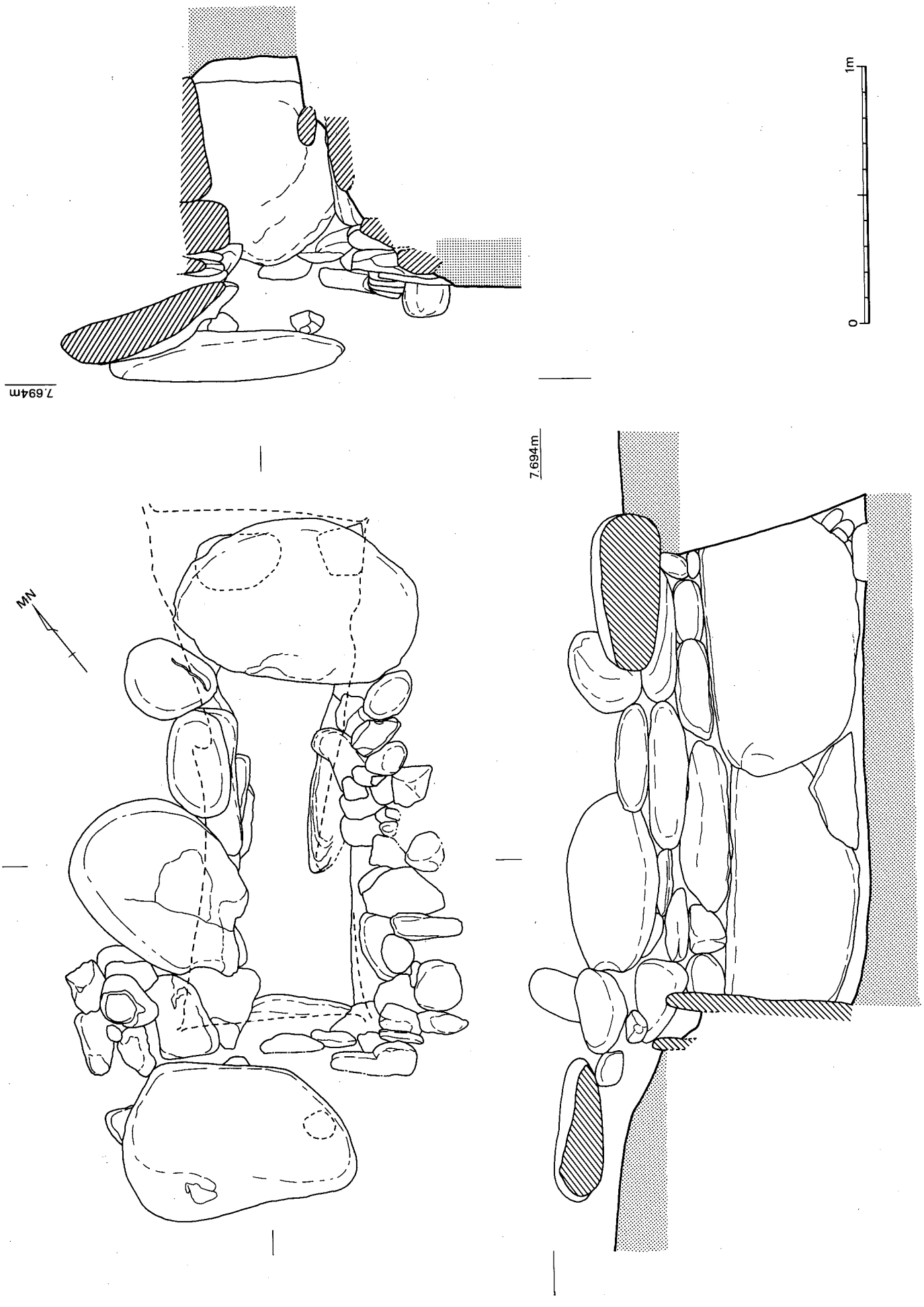
地元の人の話では「島原大変」の遭難者を埋葬した積石塚といわれる。一辺が2m30cm程である。



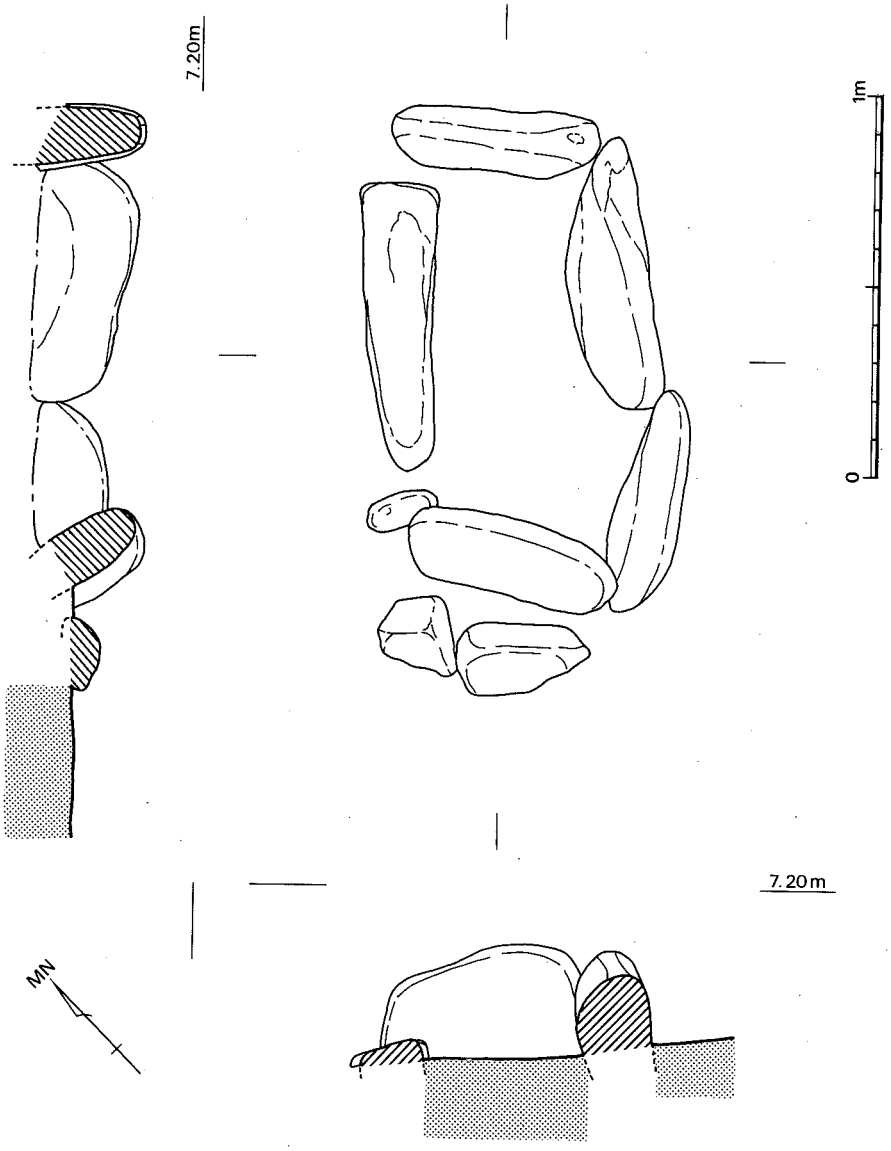
第3図　遺構及び試掘壙配置図　1/5,000



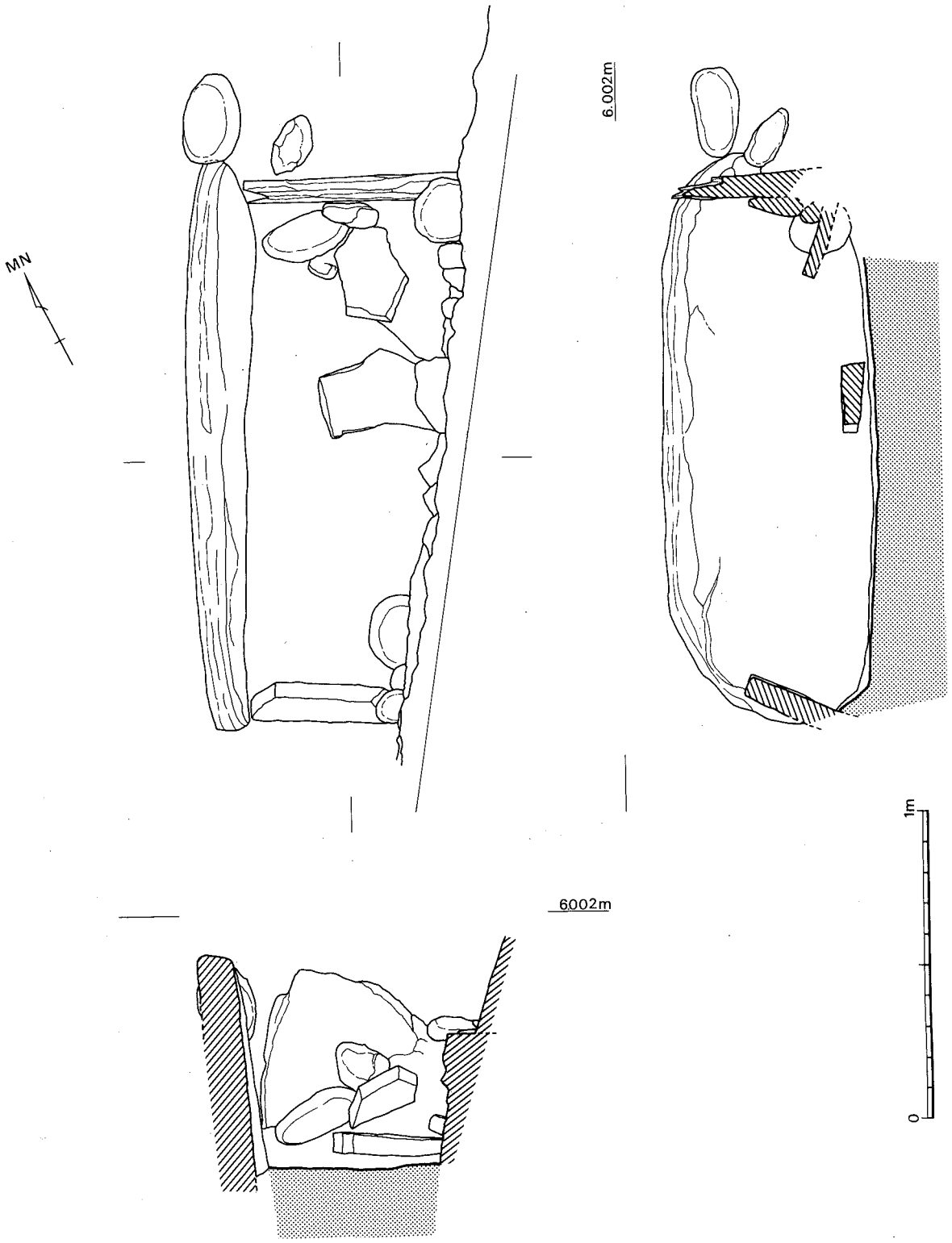
第4図　1号墳石室　1/20



第5図　2号墳石室　1/20



第6図　3号石棺　1/20



第7図　4号石棺　1/20

V　出土遺物

1．土　器

本遺跡出土の土器には，縄文時代後期，弥生時代前・中期のものと，古墳時代のものと思われる土師器及び須恵器等がみられる。これらの出土分布は，33の資料以外は全てＴＰ９以西の貝塚の包含層ないしは，それの上・下層より検出している。

縄文時代後期の土器

該期のものとしては，平行沈線文にスリ消縄文を施し，西平式もしくは西平式の影響をうけた三万田式のもの（２，３），三万田式のもの（１，４，14）等がある。

１は平行沈線文に斜行沈線文を施す。焼成良好，ＴＰ８Ⅲ層からの出土。２と３は平行沈線文にスリ消縄文を施す資料である。２はＴＰ８Ⅲ層，３はＴＰ６Ⅱ層の出土である。４は比較的薄手で焼成良好，口縁部は内傾する。ＴＰ５Ⅲ層からの出土である。５～７は内外の表面に研磨を施すもの，８～15は粗製土器である。５は上端外面に２条の細沈線を施している。14は３条の凹線を施し凹線間に稜線をなしている。稜線のところを指で上下につまんだような跡を細い棒で両方ともつついている。石英粒，長石，角閃石等を多含する。５～８，14がＴＰ８Ⅲ層，10～13，15，16がＴＰ６Ⅱ層，９がＴＰ４Ⅳ層からの出土である。

弥生時代の土器

17～24は甕の口縁部分である。断面三角形を呈し上面が平坦なもの17～21と，逆Ｌ字形をなし上面が平坦なもの22，同じく逆Ｌ字形をなし上面が凹むもの23等がある。24は刻目をもつ如意形口縁の甕の口縁部である。25～27は凸帯をめぐらし刻目を入れている。25は壷の破片であろうか。28～30は外面に刷毛目調整を施している。17，20，21，26～28，30がＴＰ５Ⅲ層，18，19，22～24がＴＰ３Ⅳ下層，25はＴＰ４Ⅳ層，29はＴＰ６Ⅱ層からの出土である。

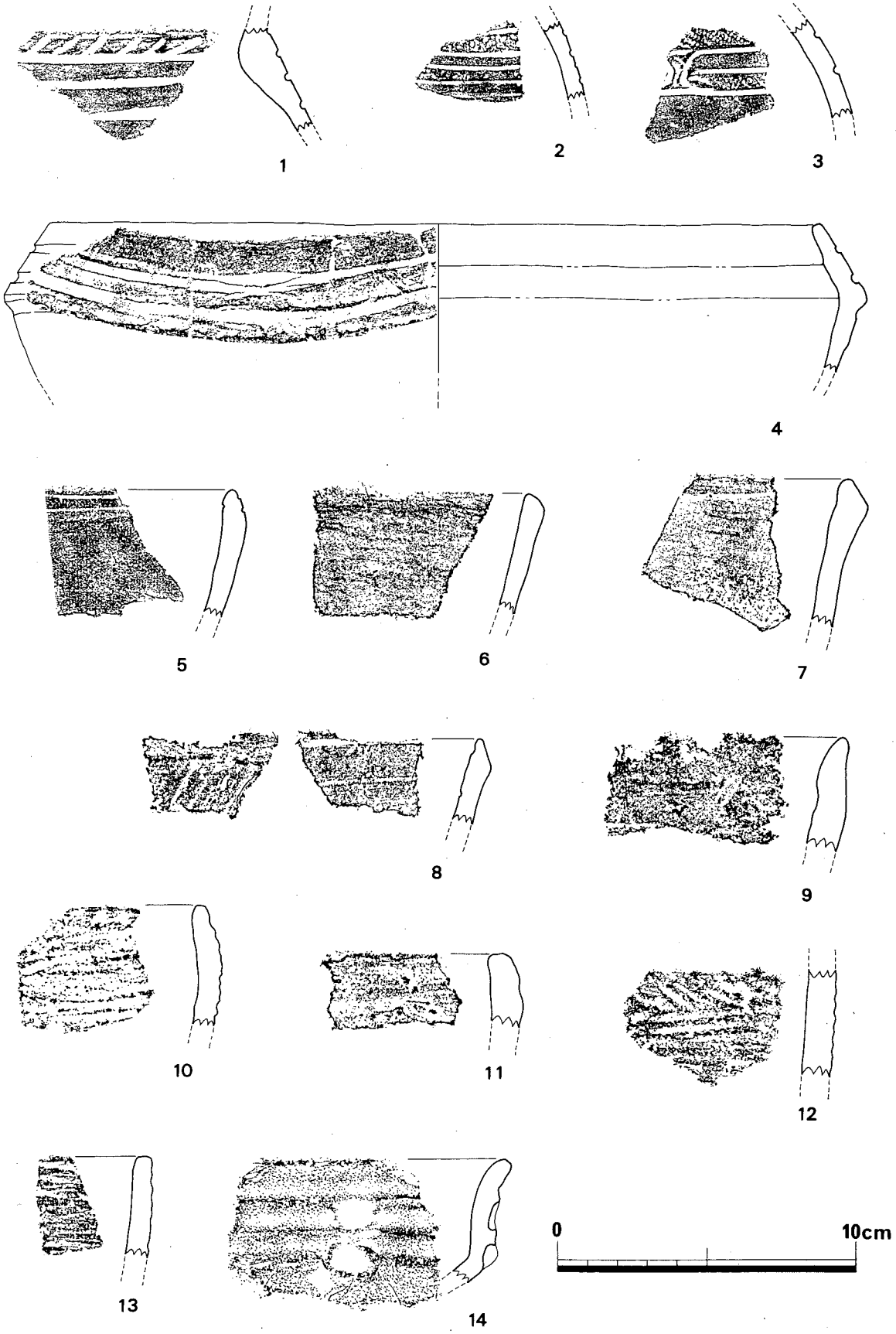
その他の土器

31は土師質土器，33は須恵質の土器である。31はＴＰ８Ⅲ層，33はＴＰ12黄灰色細砂礫層からの出土である。

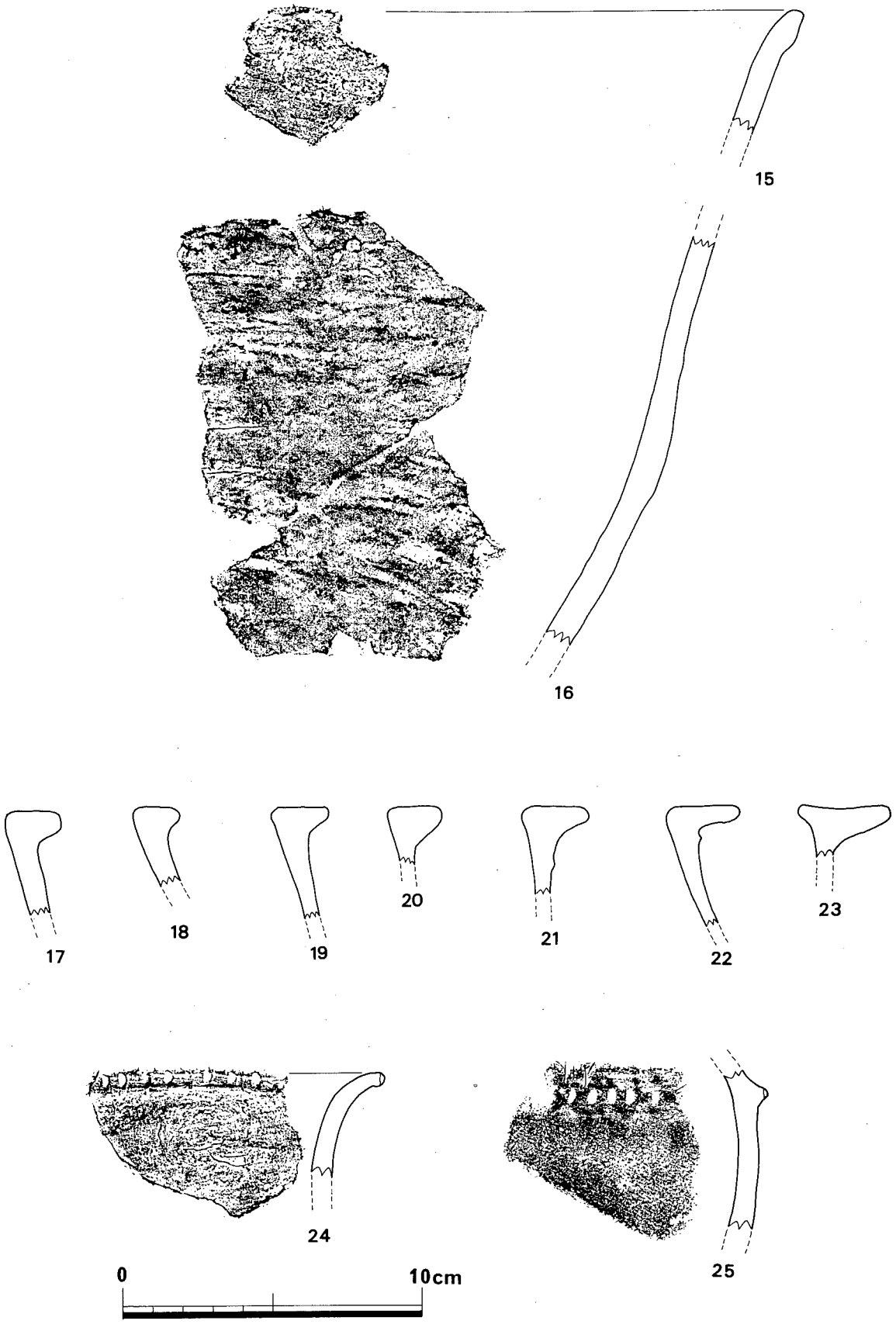
底　部

32は甕脚部である。深い上げ底で奥に二段の弱い段差があるＴＰ５Ⅲ層からの出土である。34～40は浅い上げ底の底部である。38，39は表面が研磨されている。41～43は平底の底部である。43の底部外面には指あとが残っている。34～37がＴＰ５Ⅲ層，38～41はＴＰ８Ⅲ層，42はＴＰ６Ⅱ層，43はＴＰ３Ⅳ下層からの出土である。

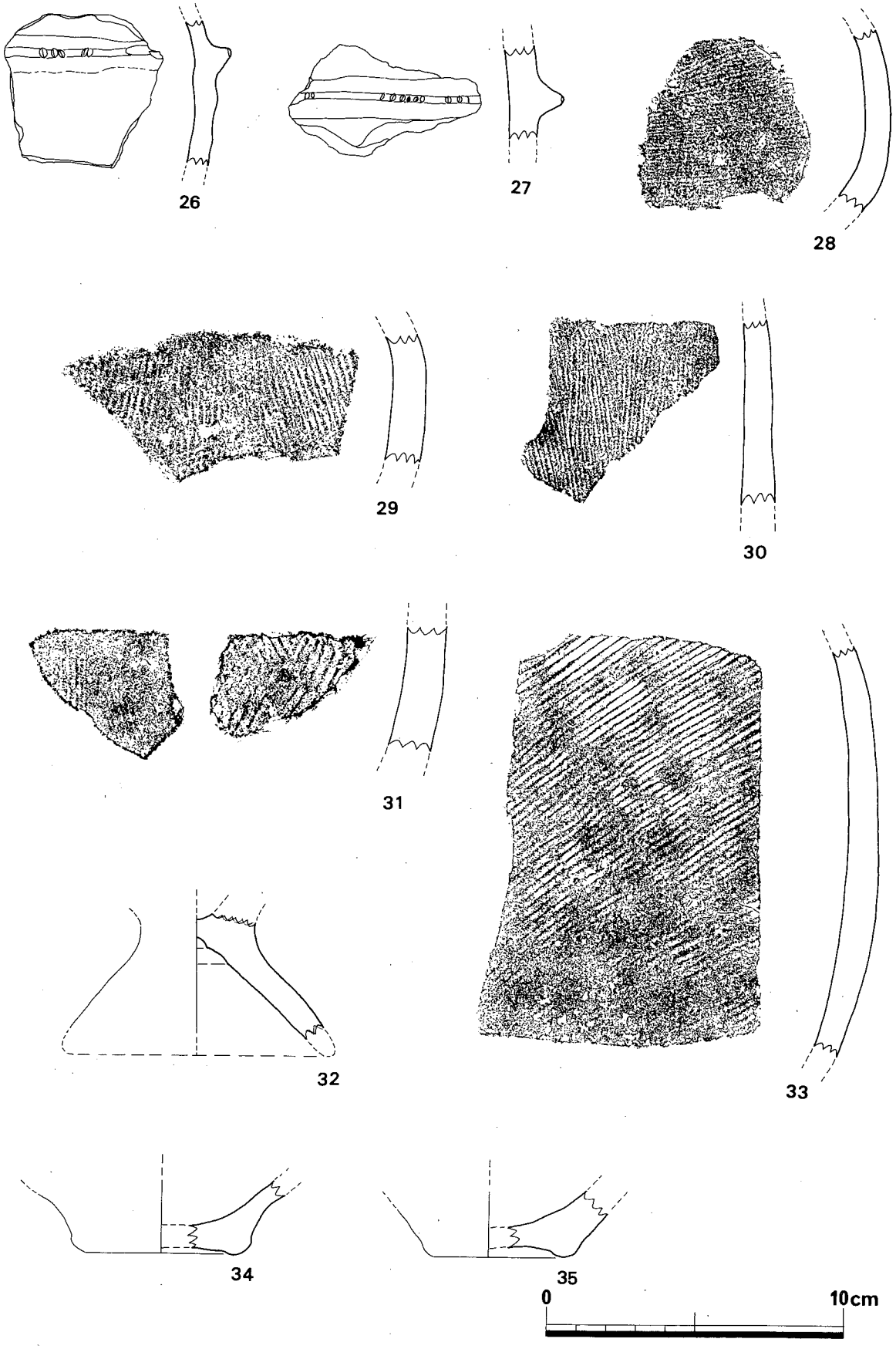
土器の出土状況には時代別の分布の扁在が認められる。縄文時代後期のものはＴＰ８，ＴＰ６，４の範囲に，弥生時代のものはＴＰ４，５，７あたりに認められそうである。38，39の表面が研磨されている底部は縄文時代後期に属するものであろう。



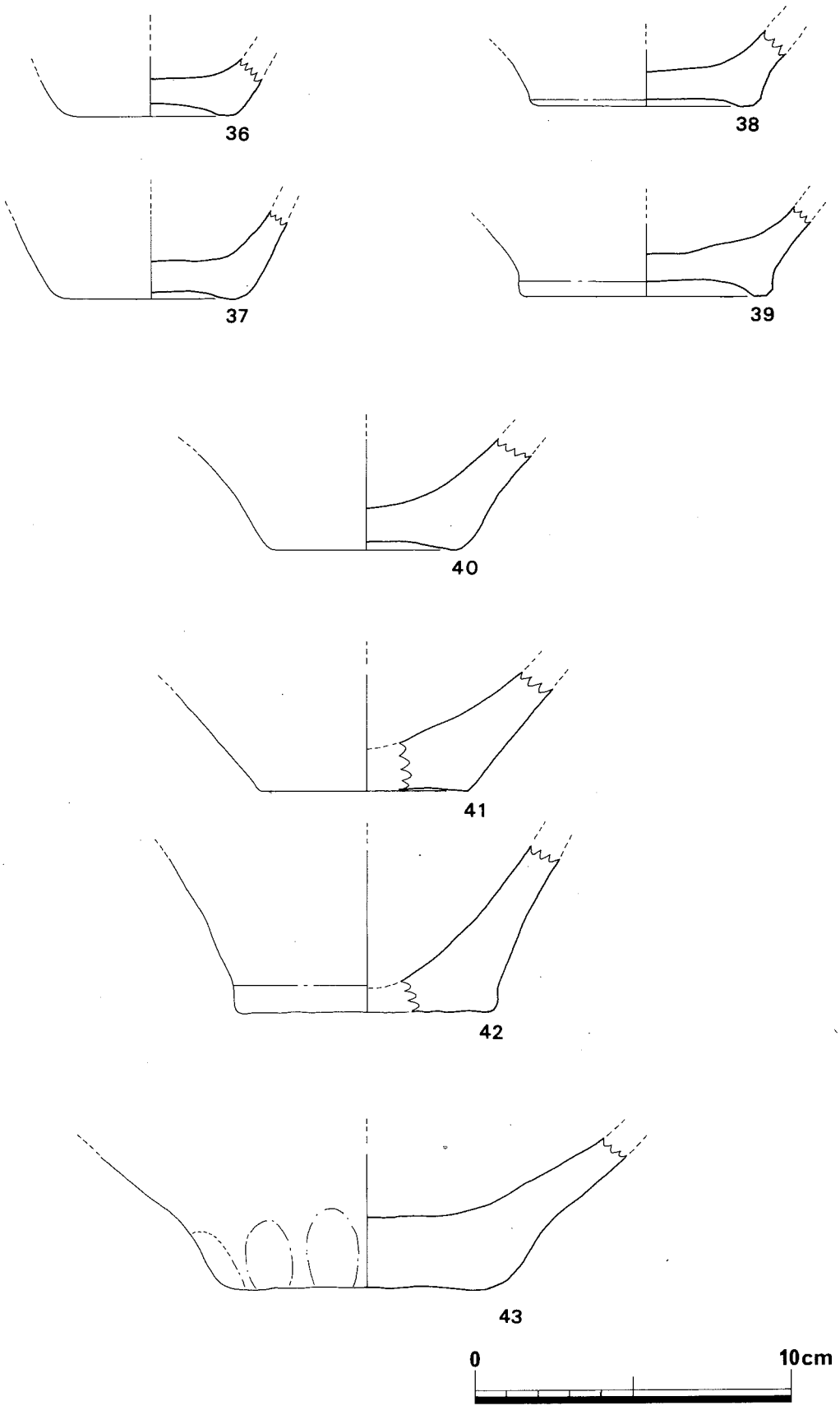
第8図　出土土器①　1/2



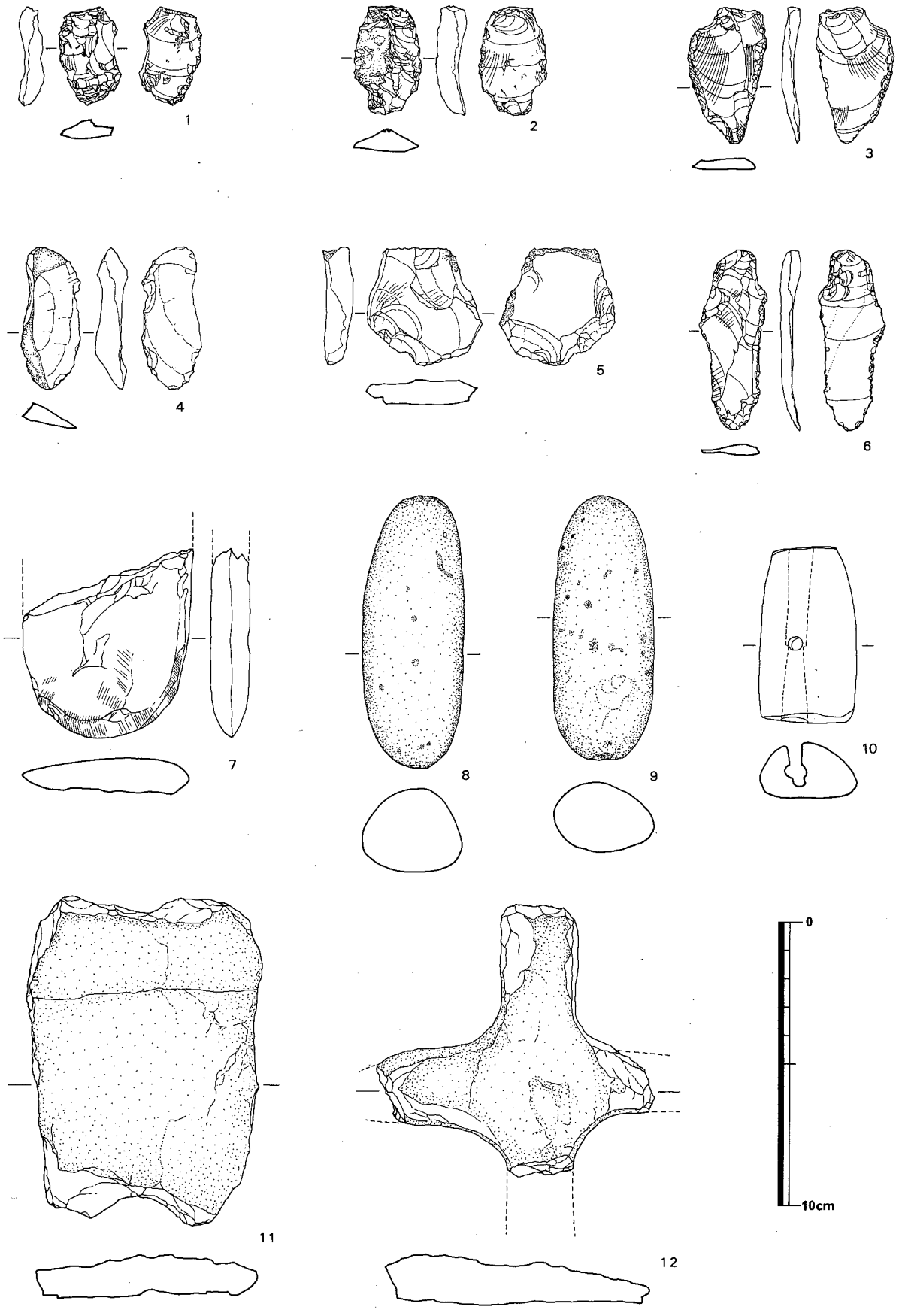
第9図　出土土器②　1/2



第10図　出土土器③　1／2



第11図　出土土器④　1/2

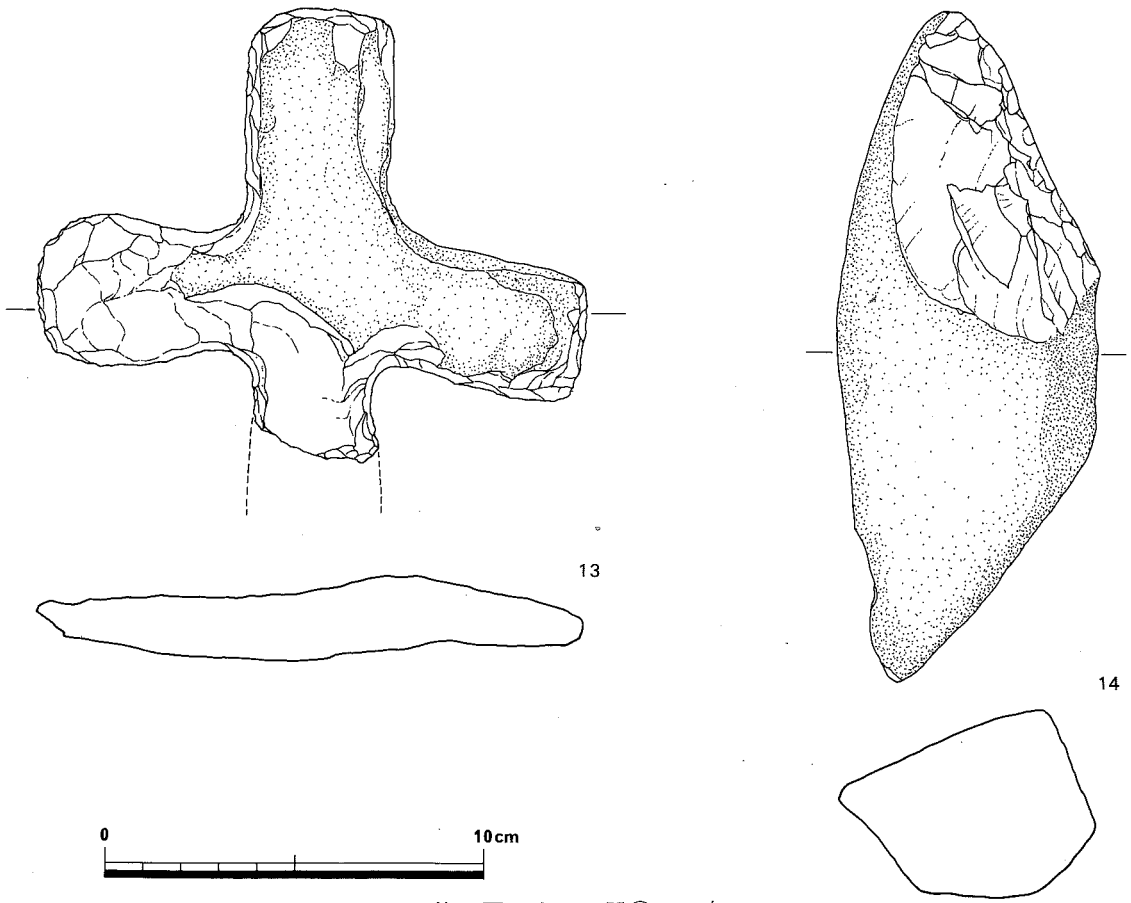


第12図　出土石器①　1/2

2．石　器

出土した石器としては，スクレーパー，サイドスクレーパー，磨製石斧，叩き石，玉，礫石錘，十字形石器，礫器等がある。

1，2は黒曜石製の使用痕ある剝片である。1はＴＰ３Ⅳ下層，2はＴＰ５Ⅳ層の出土である。双方とも中に白い不純物が認められ，熊本県と鹿児島の両県をまたいで分布する上場・石飛地方産の原石だと思われる。3，6は漆黒色の黒曜石製のサイドスクレーパーである。いずれも側辺に刃潰し加工を施し，その部位を掻器として使用したものだろうか。3はＴＰ６Ⅱ層，4はＴＰ４Ⅳ層，4は安山岩製の使用痕ある剝片である。ＴＰ３Ⅳ下層の出土。5は安山岩製のスクレーパーである。ＴＰ６Ⅱ層出土。7は蛇紋岩製の磨製石斧である。比較的厚味がない。ＴＰ５Ⅳ層の出土。8，9は叩き石である。8はＴＰ６Ⅱ層，9はＴＰ５Ⅲ層の出土である。10は玉髄製の玉である。長さ6.2cm，最大幅3.4cm，厚さ2.0cm，重量72ｇをはかる。長軸に沿って両端から穿孔しており，中央にいくに従って孔径が小さくなり，この長軸の穿孔に対して直交して図中正面中央より穿孔するが，貫通せずに度中で止まっている。類似品としては諫早市・平遺跡の出土品がある。これも表面が軟質で石材は「玉髄（ぎょくずい）」であるが，長軸の穿孔に対する直交する短軸からの穿孔はない。ＴＰ６Ⅲ層の出土である。11は結晶片岩製の礫石錘である。長軸側に加工を施している。長さ11.6cm，最大幅8.2cm，厚さ1.5cm，重さ213ｇである。ＴＰ５，Ⅲ層出土。12，13は結晶片岩製十字形石器である。12は３カ所欠損，13は１カ所欠損している。13の方が比較的大きい。12，13ともＴＰ６Ⅲ層の出土。14は尖頭状の礫器である。ＴＰ３Ⅳ下層の出土である。



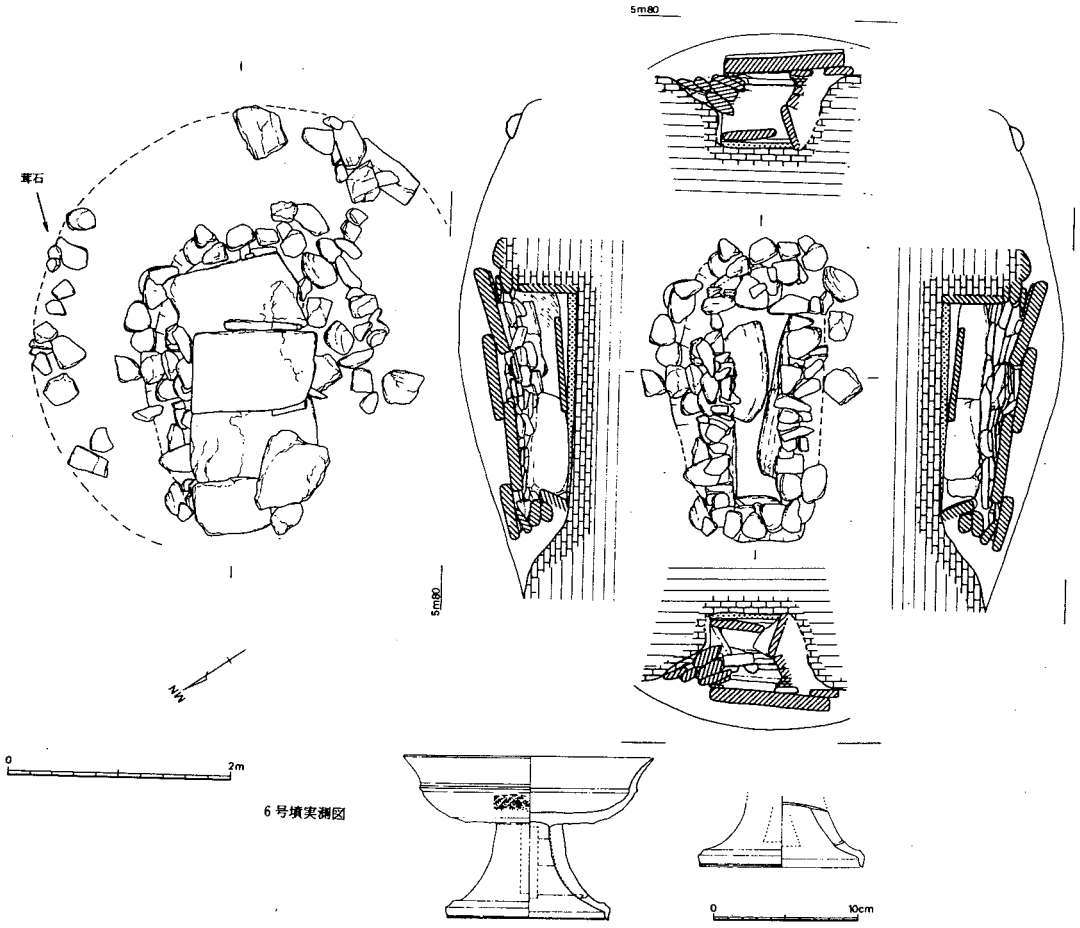
第13図　出土石器②　1／2

VI　ま　と　め

今回の調査の主目的は，石棺・石室及び古墳等の基数確認であった。結果的には新たに発見されたのは3号石棺のみにとどまったし，石棺・石室に副葬及び付属する出土遺物等も確認されなかったので石棺・石室等の所属時期も判然としないままに終わってしまった。古墳時代の数少ない出土遺物としてはＴＰ１，５層から出土した５世紀代のものと思われる土師器高杯の脚部がある位である。

この基数確認調査の過程で，縄文時代後期及び弥生時代前・中期の貝塚を確認した。今回は貝塚調査が目的でなかったので十分とはいえないまでも該期の様相の一端を垣間見ることができた。

まず，石棺・石室は構造及び法量等からその所属時期を類推するしかないが，４号石棺は，内法が170cmと比較的長く大きいことから古墳時代に属するものではないかと思われる。１・２号の石室は石棺を構築した上に，海浜円礫等を平積みしているという特徴をもっている。同じ構造をもつものとしては，西彼杵郡時津町の前島古墳群の６号墳がある。法量的にはこの６号墳が石室の長さが１m90cmという事で，大きさ的には１号と２号の中間ということになる。前島６号墳の場合も石室内外に副葬された遺物等は発見されていないが，封土の据部から５世紀代の無蓋高杯が出土しているので該期に属するものだろう。この６号墳では蓋石と，その上に封土が残存していた。



第14図　前島古墳群第６号墳（註１文献より転載）

この前島古墳群を調査した福田一志氏[註1]は，大村湾を中心とする５世紀代の古墳について次の４つのタイプに分類している。

ⓐ　前方後円墳で内部主体は石棺系横口式石室（ひさご塚古墳）

ⓑ　石棺系横口式石室であるが，竪穴系横口式石室の影響が大きい（黄金山古墳）

ⓒ　主体部は箱式石棺で，側面上にⓑの影響なのか，数段の板石積を行う（前島６号墳，小佐古石棺１号石棺，下釜１・２号墳石室）。

ⓓ　ⓒの石棺に簡単な横口を設けるもの（長崎市曲崎古墳群）。

これらの４つのタイプは，すべて在来の箱式石棺を基盤とするもので，他からの影響の中でも，伝統的な墓制から脱皮できない，あるいはしない大村湾岸の地域制を表しているものと思われると述べているが，下釜１・２号石室はⓒのタイプに属する。石室の石材には海浜円礫を使用するという特徴をもっている。ⓒⓓタイプは今迄のところ橘湾沿岸では，海浜円礫を多用している。

縄文時代後期及び弥生時代前・中期の貝塚の範囲を確認し，それぞれの時期の土器と石器が出土した。縄文時代後期では，西平式及び三万田式土器に伴って十字形石器，「鈴桶技法」による黒曜石製サイドスクレーパー（漆黒色の良質な黒曜石で腰岳産だと思われる）。石斧，玉等が出土している。

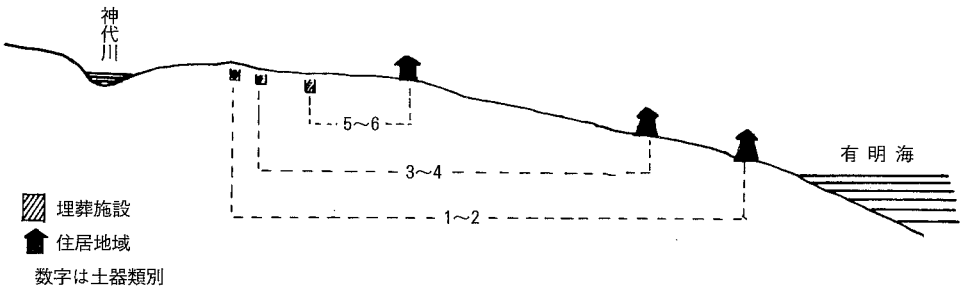
弥生時代前・中期土器に伴っては，白い不純物を含む上場・石飛地方産黒曜石製の使用痕ある剝片と，尖頭状の礫器が出土している。使用痕ある剝片の剝離技術は，比較的小形の原石（４～５cm）を母岩としてアトランダムに大量の不定形剝片を生産する技術によっており，縄文晩期全般に共通した「十郎川型剝片剝離技術」と命名されている技術の流れをくむものであろう。縄文時代後期に伴うサイドスクレーパーの「鈴桶技法」とは石材の質，剝片の形ともにその差が際立っており，明らかな「石器技法」の差が看取される。

吉留秀敏氏は，「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価」の中で福岡県早良平野の該期の石器群を分析し，縄文時代後期中葉に「鈴桶型刃器技法」が現れる。後期後葉では同じく「鈴桶型刃器技法」によるが，縦長を基調としながらも，やや不整な剝片が多くなる。礫石器にはこれまでの組成に加えて十字形石器，石製円盤などの新たな器種が出現すると述べている[註2]。後期後葉から末葉にこの技術は剝片素材生産の主役から後退し，縦長であるが企画性に乏しい不定形剝片を生産する剝離技術に主体が移るといわれている。橘昌信氏は，この企画性に乏しい不定形剝片を生産する剝離技術を「十郎川型剝片剝離技術」とし，晩期後葉から弥生時代前期末葉まで存在した[註3]と述べている。

吉留秀敏氏は，縄文時代後期中葉における「鈴桶型刃器技法」の出現は，ひとつの画期としてとらえられ，土器類においてもこの前後の時期に文様，器種，組成に大きな変化があり，該期の社会総体の変化として考慮すべきであろうと述べ，より具体的には後期中葉に東日本からの影響により導入した扁平打製石斧による掘削技術に，半島・大陸から招来した栽培種を適用し，いわば北部九州的な栽培活動が開始されたと考えられるとしている。

長崎県にとどまらず全国的にみても，この後・晩期の栽培活動の研究を行った研究者の一人は古田正隆氏であろう。古田氏は昭和32年から国見郷土会等によって行われた筏遺跡の発掘調査の成果を総

めた。筏遺跡出土の土器を1～6種に分け(筏1～2種，筏3～4種，筏5～6種)，それぞれ西平文化期，三万田文化期，御領文化期に該当するとされる。そして，それぞれ所属する貝塚文化と，これと平行する台地文化期について下図のように提示した。[註4]



第15図　埋葬地と住居地域関係様式図（註4文献より転載）

そして，「図では，居住地と埋葬地の関係を示したのであるが，採集社会は，主たる採集物によって居住地を決めるのであり，海の幸採集々団は海岸に接して居住するのは当然で弥生文化においても同様である。採集々団が，農耕生産を新たに採り入れたとしても，その一方にたよることはできず，海岸生活体は，海岸に居住しなければならない，それが徐々に台地に登り，埋葬地に接近することは，一は農耕生産技術の向上と，生産の発展を意味し，一は厚葬の意義を甚だ深まらせ，思想を深めた結果であり，筏遺跡は，このような過程を知り得る標式的遺跡である」と述べている。

武末純一氏は，『縄文後晩期農耕論への断想』の中で，「後晩期農耕論を通読して生ずるのは，弥生時代成立の前提としての農耕論という視点が強すぎるのではないかという疑問である。もちろんそうした視点も必要だろうが，その他に，自然への適応を深めていくなかで，成熟した採集社会を支えるための農耕という視点も必要ではないか」[註5]と述べている。『縄文後晩期農耕論』を考える場合はより慎重で冷静でなければならないとの主旨であろう。

限定された発掘調査による，ささやかな知見にもかかわらず，針小棒大なまとめに終わってしまったが，この下ノ釜貝塚一帯が，縄文後晩期の社会変化を考える上で好フィールドとの認識から発したもので御寛恕を願う次第である。

註1　福田一志『前島古墳群II』時津町埋蔵文化財調査報告書第2集　1994　長崎県時津町教育委員会

註2　吉留秀敏「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価」――早良平野を中心として――『古文化談叢』第30集（上）古文化談叢発刊20周年小田冨士雄代表還暦記念論集（I）　1993　九州古文化研究会

註3　橘　昌信「縄文時代晩期の石器――西北九州における石器研究――」『史学論叢』15号　1984

註4　古田正隆　諫見冨士郎　本間貞夫『西北九州における縄文後晩期埋葬域成立の意義を探る――特に筏遺跡を中心として――社研部報告第11号　1978　国見高等学校社研部

註5　武末純一「縄文後晩期農耕論への断想」『古文化談叢』第30集（下）古文化談叢発刊20周年小田冨士雄代表還暦記念論集(I)　1993　九州古文化研究会

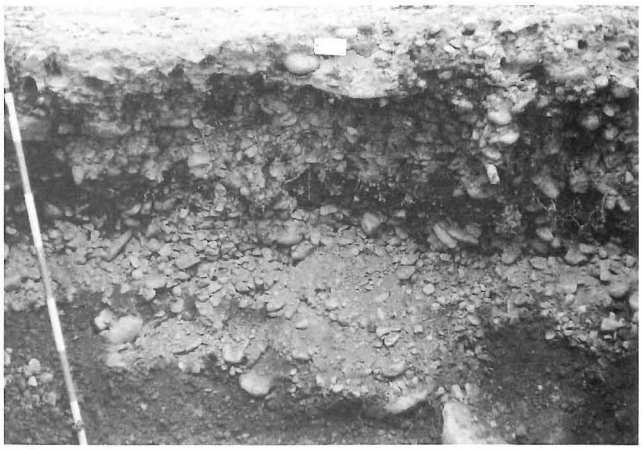
図　　版

遺跡遠景（西側より撮影）

発 掘 状 況

図版 2

ＴＰ６　集　　石

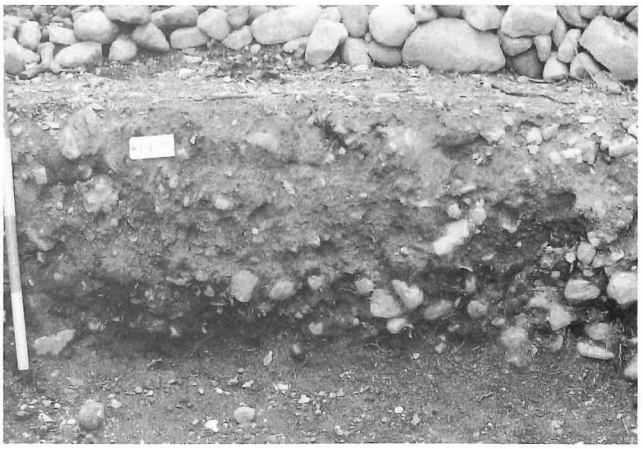


ＴＰＩ　北　　壁

ＴＰ３　南　　壁

ＴＰ４　西　　壁

ＴＰ６　北　　壁



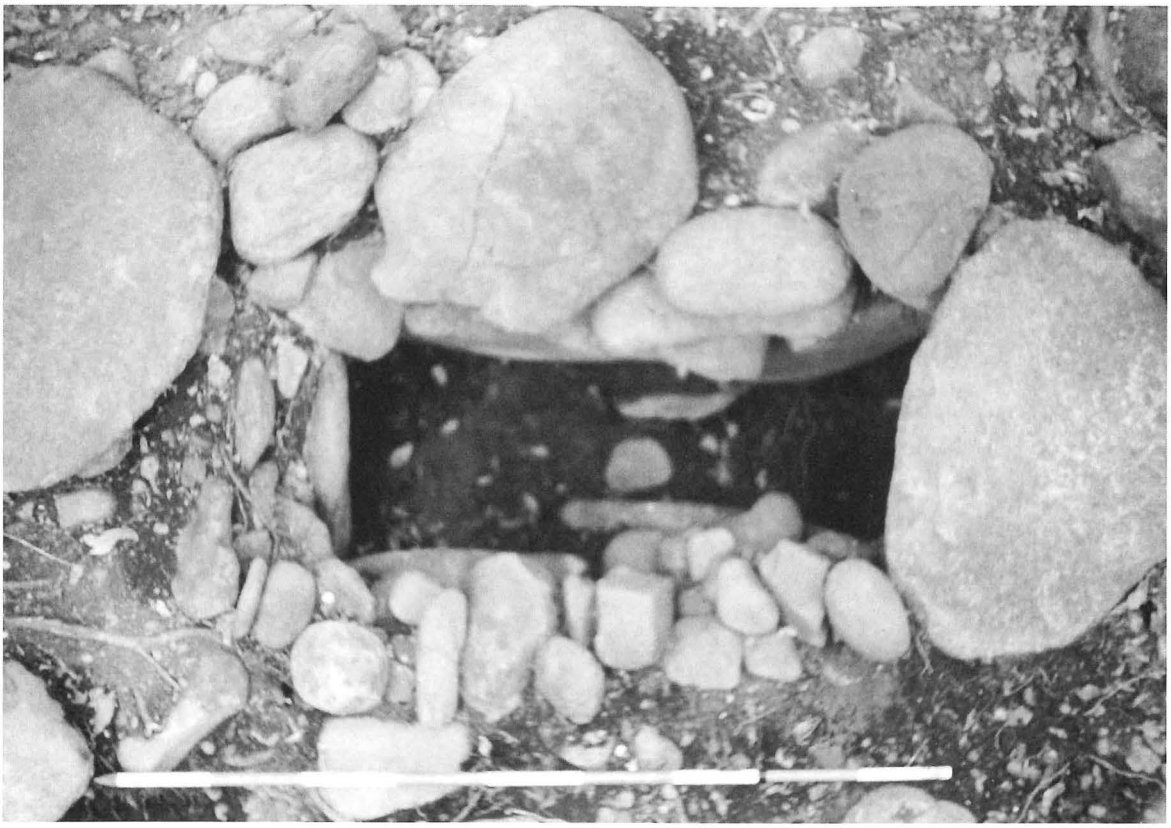
ＴＰ８　北　　壁

土層壁面及びＴＰ６集石

1号墳石室

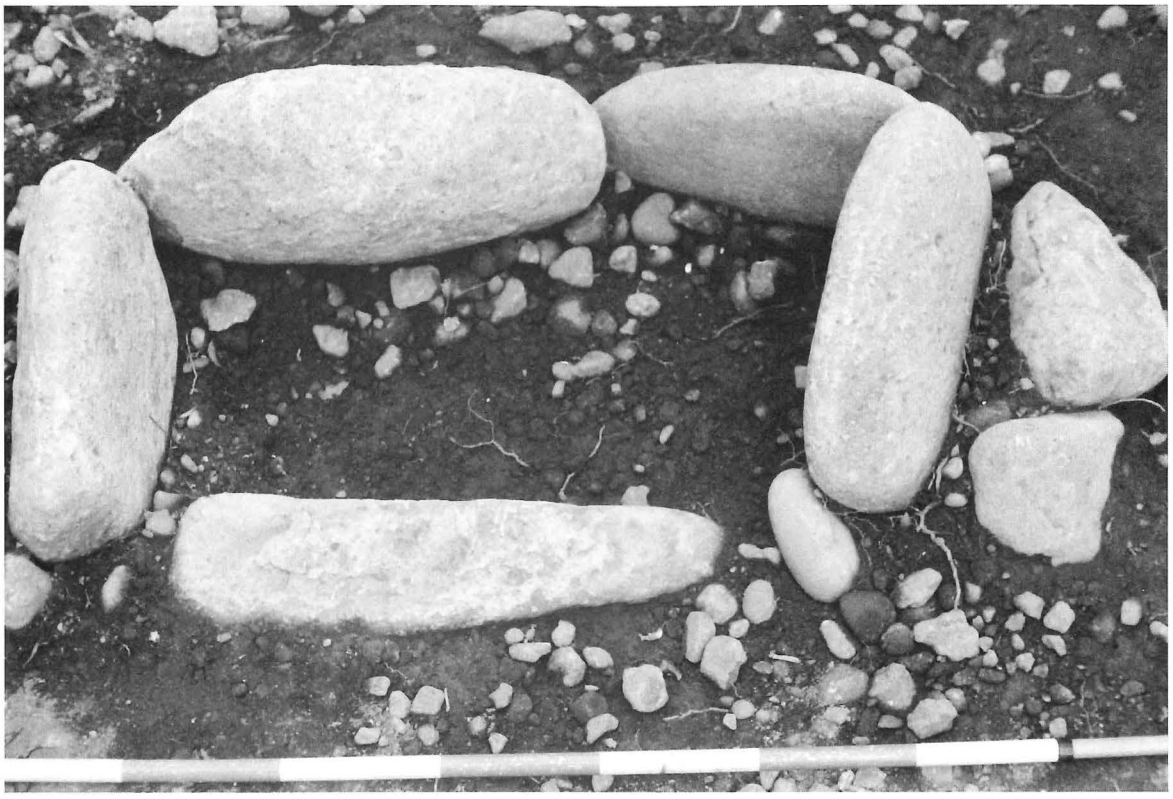
同上　北側々壁

図版 4



2 号墳石室

同上　北側々壁

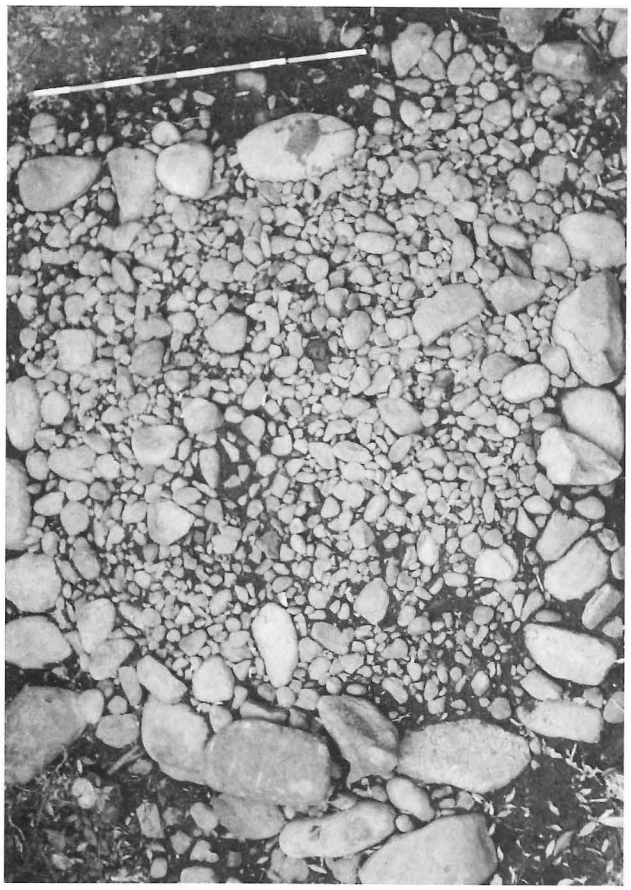


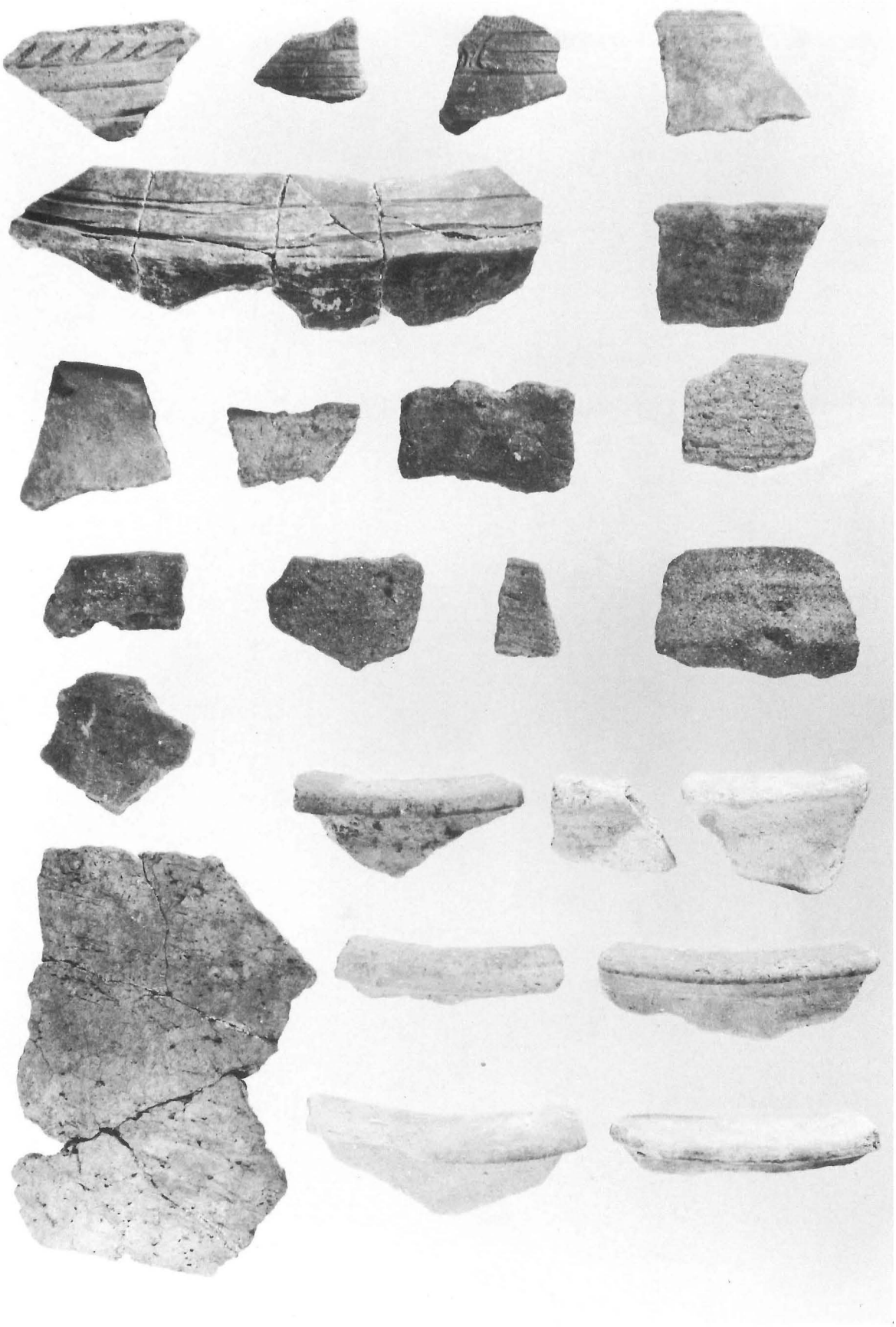
3 号石棺

4 号石棺

図版 6

寛政四年（一七九二）の雲仙岳大噴火に伴う「島原大変」の遭難者を埋葬した積石塚

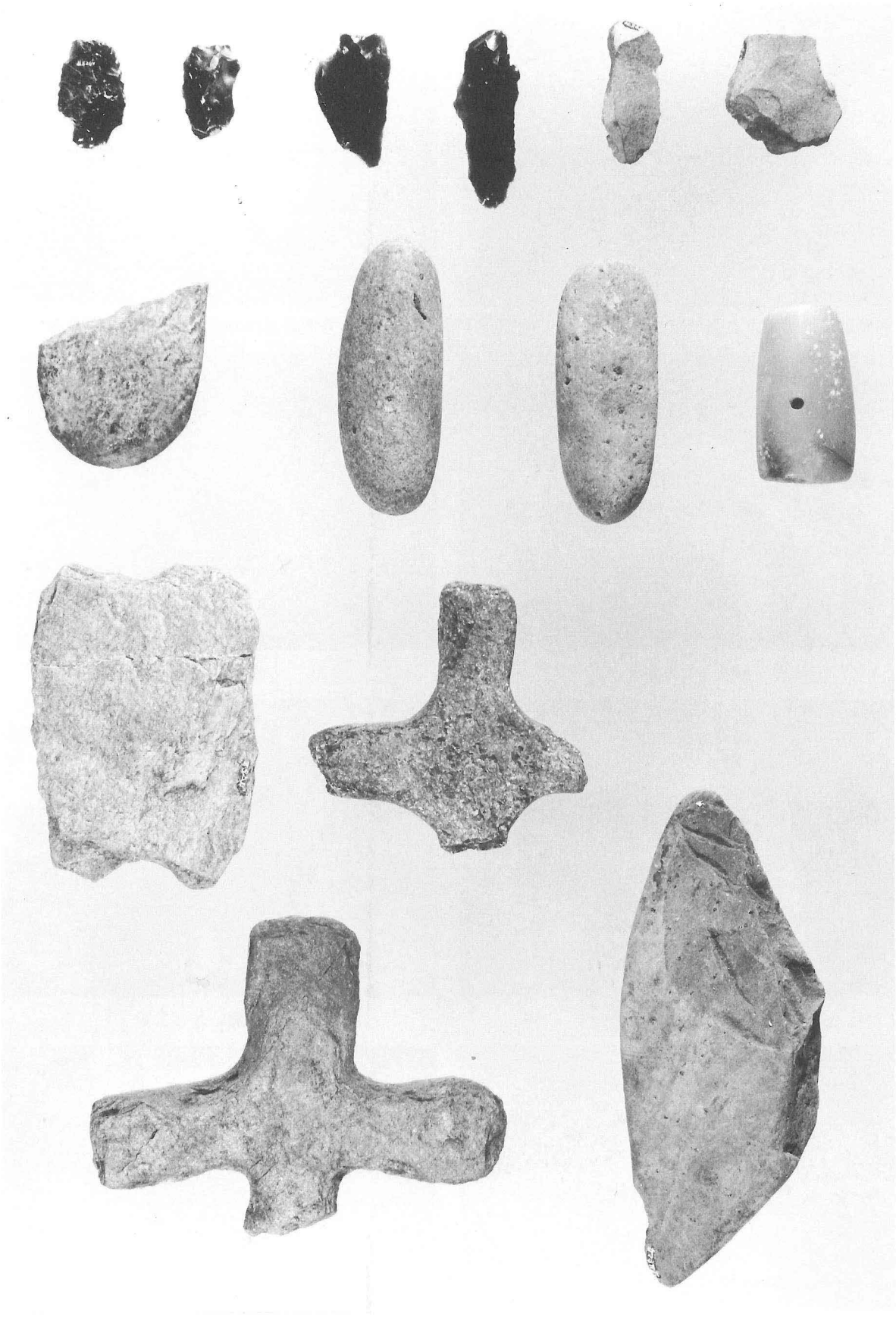




出土土器①　1 / 2

図版 8

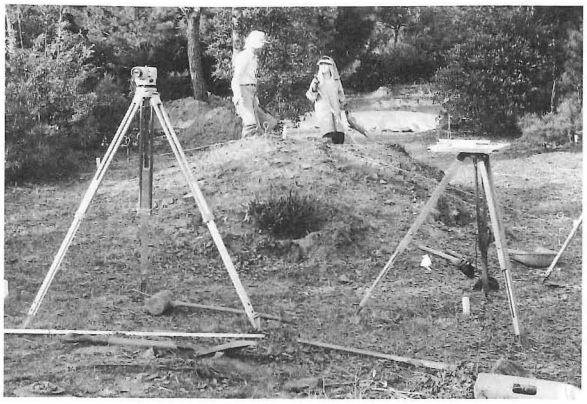
出土土器②　1／2



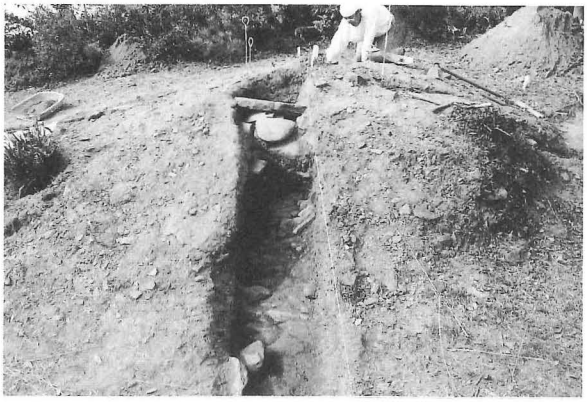
出土石器　1／2

図版10

右手前第 6 号墳，左側が第 5 号墳(平成 2 年調査前)



第 6 号墳発掘前の状況(平成 5 年調査)



封土及び石室蓋石

左 に 同 じ

蓋石の状況

蓋石を開いたところ

蓋石を開いたところ

石室の状況

前島古墳群第 6 号墳発掘状況

報告書抄録

ふりがな	しもがませっかんぐん しも かまかいづか
書名	下釜石棺群・下ノ釜貝塚
副書名	
巻次	飯盛町埋蔵文化財調査報告書第2集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	村川逸朗
編集機関	長崎県北高来郡飯盛町教育委員会
所在地	〒854-11 長崎県北高来郡飯盛町開名1929—3　TEL (0957) 48—0049
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
しもがませっかんぐん 下釜石棺群	いいもり しもがま よこつ 飯盛町下釜名横津			32°45′33″	130°1′58″	19930920～	130m²	保安林整備工事
しも かまかいづか 下ノ釜貝塚	〃			〃	〃	19931013		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下釜石棺群	石棺・石室	古墳時代？	石棺・石室		
下ノ釜貝塚	貝塚	縄文・弥生	集石遺構	〔土器〕 縄文時代後期（西平・三万田式土器） 弥生時代前・中期土器 〔石器〕 スクレーパー，サイドスクレーパー，磨製石斧，叩き石，玉礫石錘，十字形石器，礫石錘	縄文時代後期と弥生時代前・中期においてそれぞれ違った石刃技法がみられる。

飯盛町埋蔵文化財調査報告書第2集

下釜石棺群・下ノ釜貝塚調査報告書

1995

発　行　　長崎県飯盛町教育委員会
北高来郡飯盛町開名1929―3
印　刷　　株式会社　昭和堂印刷